

グローバル人材育成に想う 【神田 茂（専門分野：グローバル人材育成）】

FellowLink 倶楽部 2014/06/01 #11 に寄稿

重厚長大を代表する企業で通算34年間勤務しましたが、その内の28年間を海外業務に関与し、入社以来その殆どが海外関連という生活でした。

その海外との関わりを振り返ってみると、大きく3つのフェーズに分かれています。近年、グローバル人材の育成が盛んに言われていますが、私なりに簡潔に表現すると、「深い専門性と柔軟な感受性をもった人物」を育成する事が肝だと思っています。

まず、1980年台前半迄は、日本の製品を怒涛の如く世界中に輸出する時代でした。相対的な円安に支えられ、品質向上一途に、「良いものは売れる筈」との信念に支えられた時代でした。

この時代、最初の駐在としてヨーロッパに勤務しましたが、強烈な印象に残ったシーンがあります。自分を含め、日本人駐在員は仕事に熱中し、休日もお構いなし、本社から突然のアポイント要請に如何に上手く応えるか、を自慢していたものでした。そんなある日、ベテラン秘書が、熱血駐在員に「こんな急なアポイントを相手の会社トップに取る事は出来ない、常識はずれだ」と言い出し、その駐在員と論争になりました。そして、ベテラン秘書が最後に「ガーン」と一言。「アポイントを取る事は出来ますが、いつもこのような計画性のない仕事の仕方をしているのか、と見られますよ。私はそれが心配です！」これは、当時の私には、思いもかけない言葉で、「現地から学ぶ」事の大切さを認識した最初でした。

その後、急激な円高に見舞われ、製造業は海外シフトを本格化させていきます。そこで、その需要を満たす「工業団地」を現地パートナーと共に建設しました。フィリピンでの民間工業団地の第1号でした。このプロジェクトは、時代の波にも乗り、大成功を収めた訳ですが、ここでも、現地のパートナーから教えられる事がありました。

この時代は、東南アジアへの出張が多く、駐在も東南アジアでした。そこで、ある程度自信の出てきた英語を使って、Letterや契約書を書いていた時の事。現地を良く知る上司から「現地を使え。君よりも何倍も正確で、早い！」との一言。彼らの持てる知識や才能を見出し、最大限使う事が出来なければ、海外では仕事は出来ない、「君の仕事はその上でより正確に判断する事だ」と言うことでした。

さて、更に時代は下って、今や日本の人口は減少、少子・高齢社会が始まっています。こんな中では、単に日本で作った物を海外に売るのではなく、海外で売れるものを海外で企画（日本的な味付け）し、販売する、現地発の企画能力が必要になります。

ここでは、私達日本人が単独で動いて成功する事は殆ど不可能で、現地とのパートナーを組んで動く時代となりました。パートナーと議論をし、新しいことをクリエイトする事が求められます。単なる指示を出しているだけでは、成功は望めません。

現在、私は「グローバル人材育成」の為にフィリピンの大学への短期留学や「スカイプ英語」事業を行っていますが、それは今求められているグローバル人材の質が、これまでとは違い、パートナーと連携し、課題発掘から、議論し、解決をするという一段と進んだ関係が求められている、これに添えていきたいとの想いから出発しています。更には、若い年代（幼児、小学生）からグローバルな体験をし、柔軟な感受性、感性のアンテナを持った人材を育成できればと考えています。

【関連サイト】

フィリピンでの創業支援：<http://www.asj-partners.com>

グローバル人材短期留学：<http://www.up-ryugaku.com>

オンライン英語：<http://www.helloplanet.asia>